

港町・農業・漁業で栄えた石巻(江戸時代の石巻)



▲仙台石巻港眺望全図左

江戸時代の石巻は、港町として繁栄した現在の中心市街地、大規模な新田開発が行われ、豊かな米作地帯であった平野部、漁業が盛んで、遠隔地交易も営んでいた沿岸部の三つの地域で構成され、現在の石巻地域の基礎ができあがりました。

港町石巻と米作地帯の平野部

江戸時代初めの仙台藩領は、広大な水田開発可能地が広がっていました。藩では、北上川の改修を進めるとともに、新田開発を推し進めました。その結果、石巻地域では多くの新田が開発され、豊かな米作地帯ができあがりました。この米は藩の政策として、急速に発展しつつあった江戸に運ばれ、江戸の米の3分の1が、本石米とも呼ばれる仙台米であったといわれています。

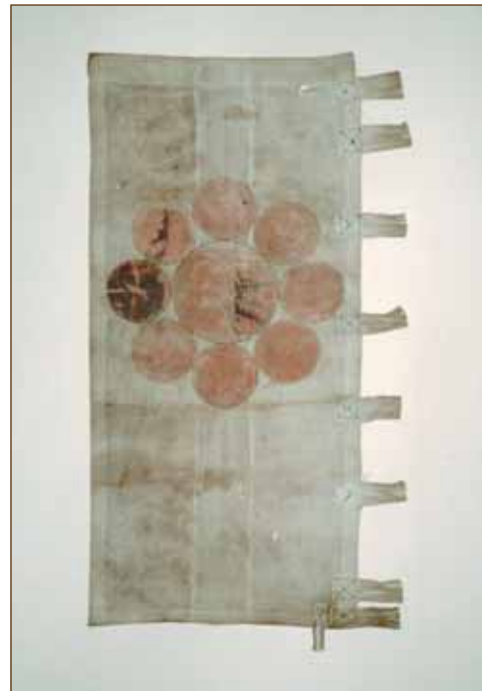
この豊かな米作地帯で生産される米の最大の積出港として整備されたのが石巻でした。

北上川を通じて石巻に集められた米などの物資は、千石船で江戸に運ばれました。石巻港は多くの船で賑わい、松尾芭蕉などは、その繁栄振りを書き残しています。



仙台藩御用船は、伊達氏の印のひとつである九曜ののぼりを掲げていた。船尾に赤九曜ののぼりが描いてある。

▲仙台藩御用船絵馬(複製)



▲仙台藩御用船ののぼり

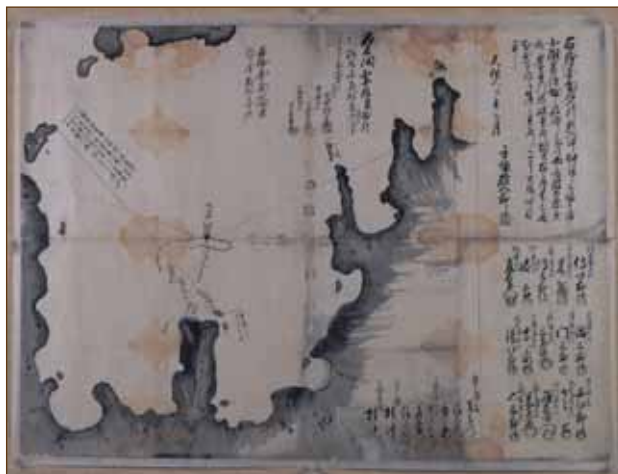


鯨崎(岩手県)から田子の浦(静岡県)までの東廻航路が描かれている。

▲改正東海舟程全図

漁業と遠隔地交易の沿岸部

リアス式海岸の入り江が広がる沿岸部は、豊富な漁業資源を持ち、江戸時代以前から沿岸漁業を行っていたと考えられています。江戸時代は紀州漁師の進出などもあって、技術の改良も進みました。また、沿岸部には、田代の平塚家・分浜の青木家などが、千石船を所有し、日本各地との交易を行っていました。



▲江戸時代後期の定置網を描いた絵図

岬の沖の魚の回遊ルートに設置されていた。



▲大漁カンバン

大漁の際に網元が網子などに配った。網子らは、これを着て練り歩いたという。

近現代の石巻

北上川舟運と太平洋沿岸航路の結節点として繁栄していた石巻ですが、明治維新以後は、鉄道の発達や工業化への乗り遅れなどにより、往時ほどの賑わいがなくなってきました。そのため、産業基盤・生活基盤の整備が急がれました。

交通網の整備は、仙北軽便鉄道(現在の石巻線)・宮城電鉄(現在の仙石線)の開通、道路網の整備などが行われました。

漁業のための魚市場の設置や水産加工業の振興、工場の誘致などが行われ、戦後には石巻工業港と石巻漁港(新漁港)が開港しました。

上水道の敷設や商業振興・教育機関の設置・消防や病院など住民の生活基盤の整備も行われました。

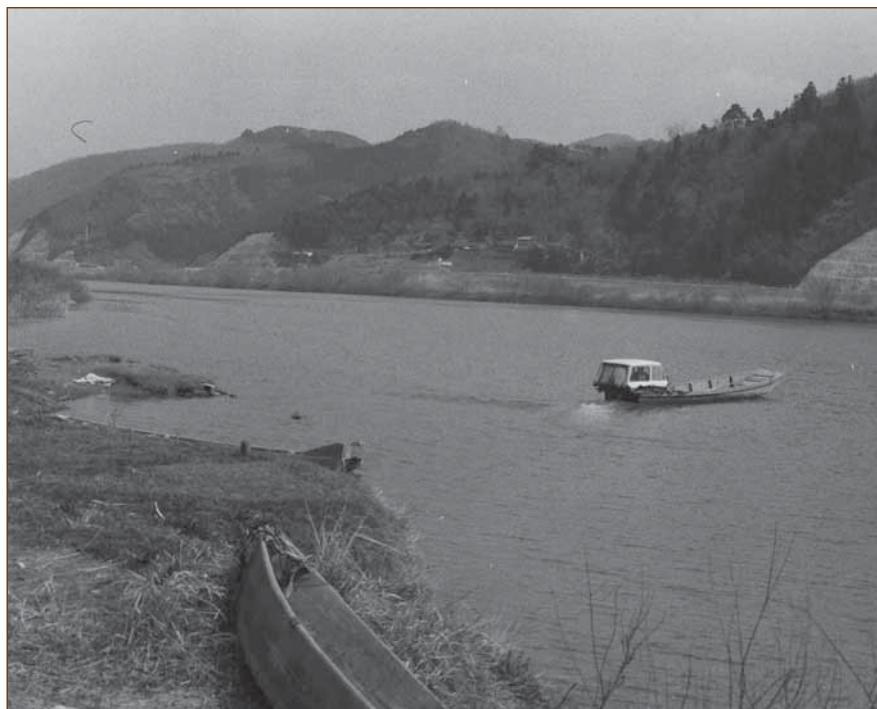
近年は、工業港の拡張・自動車専用道路の整備・下水道の整備・大学誘致・観光産業の振興など、市民生活の向上が図られ、平成17年に1市6町が合併し、新しい石巻市となりました。



▲宮城電鉄開通記念の、祝賀の記念写真



▲昭和46年(1971) 北村旭山



▲昭和48年(1973) 桃生山田の渡し船



▲宮城バス飯野川営業所(昭和40年(1965)代か)



▲完成直前の新北上大橋(昭和50年(1975)頃)